最後の代官 忠左衛門日記 ⑬

「畳の上で 死するうれしさ」

辞世の句で長命感謝し67歳の生涯に幕

明治維新という激動の時代を生き抜いた岩本忠左衛門は家督を息子の忠焉に譲ったあと、名を「十千（そせん）」と改め、地元の小学校の分校で世話人を務めながら平凡な日常を送った。その間、息子の結婚や孫の誕生など幸せなひとときを過ごした忠左衛門が最期を迎えるのは明治24年10月26日。忠焉の日記から、父忠左衛門の最期の様子を詳しく知ることができる。

忠左衛門は死を迎える1週間ほど前から病状が悪化し、発熱が続いていた。25日夜には時々、うなされるようになり、翌26日午前3時ごろには医師がやって来て忠左衛門の頭部を冷やすなどの処置をした。

昼ごろ、忠焉らは父親が自力で立てなくなったのを知り、親族など忠左衛門と懇意にしていた人たち十数人を自宅へ呼んだ。駆けつけた親族らに忠左衛門は、これまで世話になったお礼と今後も残された家族たちを見守ってもらえるよう頼んだという。

午後2時ごろ、この年の夏に忠左衛門が詠んだ辞世の句が披露されたあと、同4時に忠左衛門は息を引き取った。忠焉はその時の心境を「ああ、悲しいかな」と書き記している。

忠左衛門が残した辞世の句は次のようなものだった。「野に山に　たおれんとのみ　思いしに　畳の上で　死するうれしさ」。武士として生き、戦場で死ぬかもしれないと考えていたが、長生きして畳の上で死ねることに感謝をして詠んだものだった。

こうして、十倉領最後の代官だった忠左衛門は67歳で生涯を終えた。忠左衛門の墓は今も、十倉志茂町の如是寺の裏山に残されている。

（岡田圭司記者）

＝おわり＝

十倉志茂町の如是寺の裏山にある忠左衛門の墓（写真右）と忠左衛門が残した辞世の句